

ハイデガーによる真理論の系譜の再検討： アヴィセンナからイサク・イスラエリに遡ることは可能か

小村優太(東京大学)

ハイデガーは『存在と時間』第 44 節「現存在、開示態、および真理性」において、伝統的な真理論「知性と事物の同化」という考えがアヴィセンナ(980–1037)によるものであるが、それは結局イサク・イスラエリ(832 頃–932 頃)の『定義の書』に遡るものであるというトマス・アキナス(1225–1274)の説明を紹介している。ハイデガー自身はこの系譜学にそれ以上立ち入らないが、本発表では、この真理論の系譜それ自体を検討してみることにする。サーマーン朝のブハーラー近郊に生まれ、その後放浪の人生を送った哲学者アヴィセンナは、その主著『治癒の書』『形而上学』第 1 巻第 8 章の冒頭で、まさにトマス・アキナスに紹介された真理論を展開する。一方でアヴィセンナより 100 年ほど前に生きたユダヤ人イサク・イスラエリの『定義の書』の該当箇所には、まったく違う真理論が展開されている。そしてイサク・イスラエリの『定義の書』は、アッバース朝カリフに仕えたアラブ人哲学者キンディー(870 以降歿)の著作の引き写しであることが指摘されている。つまり、キンディーとイサク・イスラエリのあいだにはつながりがあり、アヴィセンナとトマス・アキナスのあいだにもつながりがあるのだが、イサク・イスラエリとアヴィセンナのあいだには、明確な影響関係を見出すことは極めて困難であるという事実が浮かび上がってくる。

以上のことから、トマス・アキナスがイサク・イスラエリからアヴィセンナという真理論の系譜を作り出し、ハイデガーがそれをそのまま受け入れているということが分かる。本発表ではこの真理論の系譜に関連する思想家たちのテキストに直接遡ることにより、この系譜学そのものの有効性を検討し、同時に、トマス・アキナスによって定式化される以前の、中世アラビア哲学における真理論の展開を詳細に追っていくことにする。